



建学の精神と人材育成

特集

2013年度東海大学新任教員 フォローアップ研修会 開催

学長挨拶 P1~P7

- 大学が抱えている課題
- 建学の精神と人材育成
- 一貫教育

基調講演

- 東海大学の教育について
- グローバル化に際して
- プログラム紹介

2013年度高大連携 入学前教育プログラム について P7~P8

- e-Learningによる
入学前教育プログラムについて
- 入学前教育プログラムの整理
- 付属高校以外との
高大連携入学前教育プログラム

教育支援センターでは、2013年8月29日～30日に「2013年度東海大学新任教員フォローアップ研修会」を東海大学山中湖セミナーハウスで開催し、各校舎から新任教員49名（医学部を除く）が出席しました。



2013年度東海大学新任教員フォローアップ研修会
(出席者多数のため、2回に分けて記念撮影を行いました)

今回の研修会では、学長・副学長をはじめ、多くの役職者が講演及びグループワークのファシリテーターを担当し、出席した新任教員と交流を深めました。また、開催後のアンケートでは、「理解や意識が高まった、有意義だった」という回答が多数あり、新任教員にとって満足度の高い研修となったようです。

今号の『COMMUNICATION NEWS UP』では、新任教員だけではなく、より多くの教職員と人材育成や教育についての考えを共有できるように、高野学長と山田副学長(教育担当)の講演内容をまとめましたので、是非ご一読ください。

2013年度東海大学新任教員フォローアップ研修会 学長挨拶 より**学長 高野二郎**

高野二郎 学長

おはようございます。先生方には、すでに本学で教育研究に携わっていただいています。改めてこのような研修会を行わせていただくのは、近年、大学での教育の重要性が増しているからであり、大学は教育の場

でもあります。そして研究もやっていただく、ということだと私は理解しています。つまり、研究をやるのは当たり前で、その上で、教育というものが重要性を増していくということでもあります。これは今、本学だけが言っているのではなく、多くの大学は教育重視であることは変わりません。したがって、大学では全員教育を担当していただくことが、まず重要であるということをお知らせしたいと思います。

今回の研修内容は大変盛りだくさんですが、これは大学が先生方に多くの期待をしているということだご理解いただきたいと思います。本学で半年あるいは1年半経過してお気づきになった問題点や改善すべきではないかということ率直に話し、質問していただきたいと思います。

大学が抱えている課題

さて、今、大学は色々な課題を抱えています。一つは、大学が社会から大変厳しい批判を浴びているということでもあります。その一方で、大学に対して大きな期待がかかっています。これは、これからの世界を背負って立つ人材を育成するのは大学の使命でありますから、大学に大きな期待がかかるのは当然であり、その裏返しとして、大学に対する批判がたくさんあると思っています。同年齢のうちの50%以上が大学に進学するようになれば、大学に対する注目度が自ずと高くなります。我々はどうのように社会の期待に応えるのか、更には、親や学生の期待に応えるのかということ、いつも認識しておかなければいけないのではないかと思います。

まず、文部科学省や中央教育審議会答申でも指摘されている通り、私立大学は大変高い授業料をいただいているのですから、質を高める必要があります。この質保証の問題には、少子化と大学の数の増加が関係しています。現在4年制大学は783校あり、1億2800万の人口のうちのおおよそ290万

人が常に大学生として存在すると考えるとかなりの数になるわけです。その結果、学力低下の問題が発生し、学力低下があるからこそ、質保証が必要になるのです。これは、大変重要で我々が応えなければならない課題だと思います。

また、近年はグローバル化に対応する人材の育成に大きな期待がかかっていますので、大学の教育研究を考える際にはこの課題を避けて通ることはできません。グローバル化は、大学の制度と教育内容の両方に関係します。制度については、他大学のクォーター制等が話題になっていますが、本学では Semester 制度を導入していますので、秋入学は可能となっています。しかし、年間通しての新卒採用がない等、社会がまだついてきていませんので、学生はなかなか入学してきません。これからは一層充実させる必要があると考えています。グローバル化に対応する人材を育成するために、我々は幾つかの提案をしていますし、これからはしていきます。先生方からも色々なご提案をいただけるとありがたいと思います。

建学の精神と人材育成

最初に申し上げましたが、大学は教育重視であります。もちろん研究による人材育成もありますが、大学に期待されているのは、大学の教員や研究者の育成よりもっと幅広く世界の色々な分野で活躍できる人材を育成することです。それはやはり、教育による人材育成となり、大学の使命であると考えています。

大学の使命を果たすための取り組みの中で“建学の精神”という言葉がよく使われます。私立大学はみな“建学の精神”を掲げて教育をしているのですが、この“建学の精神”を教育現場でどのように取り込むのか、そしてどのようにそれを人材育成につなげていくのかということは大変難しいことでもあります。本学には創立者の松前重義が「現代文明論」という科目を設定し、自ら講義を行ってきた歴史があり、“建学の精神”をしっかりと教育の中に反映させる努力をこれまで続けてきました。加えて、総合的な能力を有する人材を育成する目的で文理融合に取り組んできましたが、これもあくまでも総合



的な人材が育つであろうという予定調和でやってまいりました。しかし、どうも教育における予定調和というのは成り立たないということが分かってきましたので、近年はもう少し具体的な教育プログラム、トータルで人材を育成するための教育システムを作る必要がでてきました。そこで最初に作ったのがチャレンジセンターです。「4つの力:自ら考える力、集い力、挑み力、成し遂げ力」を身につけられる、学部学科の垣根を越えたシステムであります。これはカリキュラムとは別のところから始まりましたが、現在は正課カリキュラムにも導入されています。

本学ではこれまでも“建学の精神”で幅広い教養を強調し、更に実践力のある人材を育成するための教育に努めてまいりました。新たな教育システムを考える際に頻繁に“建学の精神”がでてくることはある意味では青臭い話のような気がしますが、しかしこれは最も重要だと捉えていますし、これからも常にでてくるだろうと思っています。

一貫教育

本学には14の付属高校(連携校・提携校含む)があり、そこから本学に入学する生徒は約2400人程です。つまり7000人近い新入生の約30%あまりが付属高校から入学してくるということになりますので、付属高校との関係が大変重要であります。しかし私が申し上げている一貫教育というのは、付属高校との一貫教育だけではなく、一般高校も含めた高校全体と大学との連続性、あるいは一貫性を大事にしていきたいということでもあります。ですから、付属高校かどうかということには関係なく、主に理工系においては導入教育やリメディアル教育に重点を置き、そして専門教育にきちんと入っていける教育を高校全体との一貫性を十分に考慮して取り組んでいるつもりであります。

また、退学や除籍については、以前はやむを得ないとしていたものも、現在はどういう指導をして、結局どう駄目だったのかという事ははっきりして欲しいとお願いしています。なぜこういうことを申し上げるかというと、ご承知の通り日本の私立大学は授業料が高いです。日本は高等教育への公財政支出の対GDP比が0.5%であり、これはOECD諸国と比べても最低ですし、先進国の中でも最低です。つまり学費を負担するのは親になるわけです。親は子供に対する期待を持って授業料を出すので、学生を簡単に退学や除籍にするのではなく、しっかり指導することで期待に応えていかなければならないのであります。一言で言えば、私は親や学生が納得するところまで教育することが必要だと思っています。

最後に、私は先生方とゆっくりお話をしたいと思っております。お電話をいただければいつでも部屋でお待ちしていますので、是非お越しいただければありがたいと思います。どうもありがとうございました。

プログラム紹介(1日目)

- 開会挨拶 内田晴久 教育支援センター所長
- 学長挨拶 高野二郎 学長
- 基調講演 山田清志 副学長
- 「歴史は大観すべし」DVD上映



梶井龍太郎 チャレンジセンター所長(教養学部芸術学科 教授)による
【建学の歌 歌唱指導】

- FDに関して(授業について)
押野谷康雄 教授(学長室付 工学部 動力機械工学科)
- FDに関して(メンタル面等)
芳川玲子 教授(教育支援センター付 文学部 心理・社会学科)
- モデル授業 吉田厚子 教授
(ティーチングアワード受賞者総合教育センター 現代文明論担当 主任)



【モデル授業 海が育んだ食の歴史～世界を救う食物を考える～】

- 4つの力(自ら考える力・集い力・挑み力・成し遂げ力)について
園田由紀子 講師(チャレンジセンター)



【4つの力(自ら考える力・集い力・挑み力・成し遂げ力)について】

- グループ懇談会(今、困っていること等を話し合う)
ファシリテーター



【グループ懇談会】

2013年度東海大学新任教員フォローアップ研修会 基調講演 より**副学長(教育担当) 山田清志**

山田でございます。今日の午後からは、本学の目指す「4つの力」をどのように教育に活かしていくかという具体的な話であったり、かなり技術的な模擬授業等のプログラムについての話になると思います。そういった意味では私の話は先程の高野学長のお話と午後の具体的な話のちょうど中二階のような内容とさせていただきます。高野学長からお話がありました。特に今、大学の教員に求められているのは教育の分野ではないかなと思います。高野学長が言われましたとおり、「グローバル人材」については、どこの大学でもまずは挨拶がわりにとにかくよく言われています。また、新任の先生方は採用時の面接等で、外国語での授業についても問われていると思いますので、そういう資質のある先生方が大変多くいらっしゃるのではないかと考えています。

東海大学の教育について

「4つの力」というのは本学の目指す人材に備わっている資質です。先生方も4月にご覧になっていると思いますが、冊子「東海大学の使命」には、この「4つの力」についても書かれています。すでに先生方は本学での経験の中で、色々な面でこの「4つの力」を経験されているのではないかと思います。また、文部科学省「平成25年度地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」に300以上の大学が応募しましたが、その中で私立大学としては15大学の中の1つとして本学の「To-Collaboプログラムによる全国運動型地域連携の提案」が採択を受けました。先程、高野学長からもご紹介がありましたチャレンジセンターという大きな試みを拡大し、地域の中でより実践的な体験を通じて学生に「4つの力」を涵養するというプログラムです。これについては、秋学期から徐々に各教育現場の方をお願いをしていくことになると思います。

先程、高野学長が言われた予定調和という考え方ですが、これは文理融合科目においては、学生が自らその授業の内容を消化して、そしてきちんとした教養や学問を身につけるという性善説的な考え方です。例えば、日本史の先生で、専門として縄文時代を研究されている先生が、授業でずっと縄文時代の話をしてしているとします。これは、その先生にとっては日本史の専門の話をしていることになりませんが、学生にとってみれば、今日の日本の社会の土台を築いたであろう江戸時代や明治以降の近代化のプロセス、その他、日本史の中でも今日を理解する上においては重要な部分をまったく学ばないで、日本史でC評価をとったとか、あるいはS評価をとったということになってしまうと思います。私は以前、学部長が集まった際に、今の学生は自分の好きな物を食べて体力を

つけ、体作りができるような学生ではないと思っていた方がよいのではないかと申し上げました。このことは本学に限ったことではなく、有名な国立大学や私立大学の学生でも同じような現象があると思います。ですから、我々はバランスのとれた繊



山田清志 副学長

維質やビタミンの入っている食べ物をきちんと提供して、学生が偏食に陥らないようにしないといけないのです。自分の好きな物を食べていけばきっと健康になるだろうという幻想はもはや抱かない方がよいのではないかと、つまり、自分の専門のことを極めて、専門のことを学生に話していれば、それで学生が自然に育つだろうと考えるのは今の時代では難しいと私は思います。そういった意味では、今ここにいる先生方がご指導を受けた先生とは違う苦勞が我々には課せられている気がいたします。これについては先生方からも色々ご議論があると思いますので、これからの一泊の研修の中で意見交換ができればありがたいと思います。

教育と研究についてですが、本学は「研究の峰」を形成していこうとしています。これは世界ランキングを良いポジションにつけるということにおいても非常に重要です。よくアメリカの社会は「多様性の中の統一」といわれていますが、研究についても先生方がそれぞれの専門の学問的興味の中で、多様性のある研究をされていると思います。それを大学としてどのようにそのピーク、峰を作っていくのかという意味では多様性の中の統一ということを考えていかなければいけないと思うわけです。その一方で教育ということで考えると、大学としては統一的なことを行い、その統一的な枠組みの中で先生方にそれぞれの分野の多様性を発揮していただこうとしています。その方向としては逆というか、結果的には同じようなことになるのかもしれませんが、以前のように先生方の自由な考えで教育を行っていくというには少し箍がはめられているような、ある程度大学としての統一的な教育の方向、あるいは方法に、先生方のご理解をいただかなければいけないと思っております。

グローバル化に際して

先生方は、本学のことをどの程度、目にしたり、耳にしたりする機会があったでしょうか？本学の広報媒体には、例えば、学園Eメールマガジン「SQUARE」があります。ホームページでもニュースを取り扱っていますし、毎日新聞のホームページから繋がるようになっている「東海イズム」というものもあります。また、冊子では「VISTA」、電子媒体では「学校法人東海大学広報」というものがあります。他にも「東海大学新聞」や雑誌「TOKAI」もあります。少し挙げただけでも片手では数え切れない程の本学の広報媒体があるのですが、それを全て隅から隅まで読めというのも随分な話なのですが、そこには色々な情報がでてきます。しかし、意外とご覧になっていないのではないかと気がしております。今回、私がなぜそれを強く申し上げたいかということ、実は先日、ある先生が、学会において本学のグローバル教育の取り組みについて紹介をするために教えてほしいと私を訪ねてくるということがあったからです。私としては、本学に勤務して何年も経っている先生ですので、グローバル戦略についてもある程度ご存知だろうという前提で話をしていましたら、「それはどういうことですか？」「それは何ですか？」ということの連続で30分の予定が2時間程かかってしまいました。これだけ広報媒体がたくさんあるのだから、先生方はすでに分かってくさっていると思っていたのですがそうでもなかった。これには、私も反省をしました。本学は、2005年度に国際戦略本部を作り、そして国際戦略の指針を作りました。これは今でも大きく変えているものではありません。また、「建学の精神」からどういったものが、具体的な教育や制度の中に取り入れられていくのか、それぞれに色々な解釈もあるとは思いますが、私としては国際的な東海大学を紹介していく場合に、創立者が掲げた教育による世界平和の貢献と日本のような資源を持たない国にとっては科学技術による立国、そして、そういった科学技術を大いに活性化させることによって文明社会に貢献するということが一つの大きな課題として我々の教育に課せられているのではないかと考えております。

グローバル人材を作るのに、どんなことをやるのかということの一つに、英語や非日本語による情報発信、あるいは授業があると思います。実は私は本学に勤めて25年以上経ちますが、その内のおおよそ3分の1は、本学のデンマークとホルルの施設に滞在しておりました。だからといって、英語が



上手だというわけでもありませんが、これから本学の国際関係について英語で話をしたいと思います。外国の学会等で「東海大学ってどういう大学なのですか？」と聞かれた時に話をしなくてはならないという場合があるかもしれませんので、大変お恥ずかしいのですが、今から英語でお伝えしたいと思います。

As an international trend, many Asian countries are making an attempt to increase the number of the international students. The Japanese government's target was 300,000 international students 4 or 5 years ago, but Japan still has not reached this target. Korea's target is 100,000 and China's target is 500,000. As you know, the United of States currently has 600,000 international students. Most likely, because Japan's population is half of the population of the United States, the Japanese government decided that the target number should be 300,000. Tokai University's target is 1,000, and we currently have 611 foreign students. I'm always encouraged by Chancellor Takano to increase the number of international students. Our goal is to reach a point in which international students represent 10% of the student body at Tokai University. 10% of the student body of Tokai University amounts to 3,000 international students. We are steadily increasing the number of international students. At one point, there used to be less than 500 international students at Tokai University. We reached 600 international students 2 years ago. However, because of the big earthquake on March 11 in 2011, many of the international students left Japan. But they have now returned. In order to surpass the Global 30 Universities, our goal is to have more than 700 international students attending Tokai University.

On the other hand, there are Japanese students who choose to study abroad. Tokai University used to have very strict regulations for Japanese students wanting to study abroad. In order to participate in the short two week program, they were required to take a preparatory program for one term. But we no longer have this requirement. Of course, for middle and long term programs, students are required to take some courses in advance. As you know, at present, Japanese students are reluctant to study abroad. This is the trend. However, at Tokai University, the number of students who study abroad is increasing steadily. Presumably, we can increase the number of students who study abroad to over 1,000 within a few years.

Some of you already know Hawaii Tokai International College, which is a 2-year liberal arts junior college, fully accredited by the Accrediting Commission for Community and Junior Colleges (ACCJC). In 2015, we are going to relocate next to the University of Hawaii West Oahu campus (UH West Oahu). I would assume that this is the first attempt for a Japanese University to share a campus with an American University. UH West Oahu agreed to share their campus and facilities with HTIC and Tokai University in order to strengthen their tie with Asia, to provide high quality global education and to collaborate with Tokai as research partners. This allows us to also minimize our construction cost since UH West Oahu is allowing HTIC/Tokai students to use their facilities, such as the library, cafeteria and the dormitory. The land itself is already purchased, and coming October, we are going to start construction which is scheduled to be completed in the spring of 2015. When we complete this campus, more than 700 short-term Tokai students annually would be able to study in Hawaii and experience the American way of education.

Last week, Chancellor Takano and I went to Bangkok to open the new Tokai office in central Bangkok. The size of the office is not large, however, this office will allow us to expand our activity to other Asian countries as well as Thailand. We used to have an office at King Mongkut's Institute of Technology Ladkrabang (KMITL), and we have had a very long relationship for over 50 years with KMITL. The establishment of KMITL was one of the most successful examples of the Japanese official development assistance, which was fully supported and developed by Tokai University. Three presidents of King Mongkut's Institute of Technology attended the opening ceremony for the new Bangkok office. Both the former president and current president of KMITL are Tokai graduates.

We also have an office in one of the most prestigious universities in Seoul, Korea called Hanyang University. This office is used for the preparatory programs for Korean students who come to Japan. This picture is (I don't know how many people recognize it,) the entrance of Tokai University European Center in Denmark. Former Emperor Hirohito went to Europe in 1970 and visited many European countries. At that time, he stopped over in the suburb of Copenhagen where the Tokai

University European Center is located. The person on the left is Margret II, the current Queen. She mentioned our facility when she visited Japan for a reception at the Royal Court.

We sent a large number of students to Moscow in the 70s. At that time, very few Japanese students were allowed to study there. Even the Russian major students at Tokyo University of Foreign Studies could not go to Moscow State University at that time. Tokai was given a special privilege. This year, we are going to celebrate the 40 year anniversary of the partnership. Mr. Putin, the president of the federation of Russia, received our honorary doctorate degree in 2009. This is [a picture of] the baseball stadium that Tokai University constructed for Moscow State University and Tokai University has been playing baseball with Moscow State University.

This is [a picture of] a short-term program that trains Tokai professors on teaching in English. We offered this program last February and March, and some of today's participants already participated in this program. We would like to continue offering this type of program for professors who strive to develop their skill of giving lectures in English. This program is organized by University of Queensland, which is one of the most renowned universities in Australia. It is very well organized. I'm planning on offering the program again at the end of this academic year, maybe in February and March. I hope that you will take advantage of this opportunity and enroll. We are also offering a staff development program for the Tokai University office staff at Hawaii Tokai International College in order to help them understand the overall college operation and to improve their English proficiency.

Some of you are already aware that the number of students from the Middle East is increasing. The



number of students from the Middle East will most likely continue to increase as one of the areas of concentration for our student recruitment is the Middle East at present. We have a prayer room, which is very rare for a university in Japan. Also some of the cafeterias offer halal foods. We also conduct collaborative research with one of the universities in Saudi Arabia.

Lastly I will show you this “TOKAI COOL JAPAN” program which just finished in this August. It is a two week program and the cost including accommodation is just 100,000 yen without the cost of food. 39 persons applied, and 25 students came to Japan to participate in this program. On August 2nd, 25 international students enjoyed their stay at the Tokai University Yamanakako Seminar House with 50 Japanese students.

As you can see, Tokai University students are very much interested in studying abroad and studying in an international environment.

ありがとうございました。



プログラム紹介（2日目）

■模擬授業

ファシリテーター



【模擬授業】

■研修の振り返り(グループ代表発表)、まとめ

■閉会挨拶 平野葉一 学長室長

2013年度高大連携入学前教育プログラムについて

COMMUNICATION NEWS UP第49号(2011年6月30日発行)では、高校3年間の教育を完成させるため、入学までの期間に大学に求められるものや大学における今後の課題についてとりあげました。

今号では、特に「入学前教育プログラム」の検討課題について、その後の取り組み状況を報告します。加えて、付属高校以外との高大連携入学前教育プログラムについても紹介します。※年度は実施年度(2013年度=2014年度入学生)

■e-Learningによる入学前教育プログラムについて

教育支援センターでは、付属推薦候補者に対してのe-Learningによる入学前教育プログラムを効果的に活用するために、開始時期を早期化することについて検討を進めてきました。その結果、2010年度は、12月に学習が開始されていましたが、2011、2012年度は11月開始、そして、2013年度からは9月から学習を開始できるようになりました。高校における通常授業期間中の利用が可能となり、クラス担任の先生にも積極的に指導に加わっていただくとともに、特に11月実施の「学園高大連携総合試験」前後でのe-Learningの活用が期待されています。

- ◇試験前の活用例：自分の学力をチェックする。
- ◇試験後の活用例：自分の不足部分の学力を補う。

また、2011年度からは、新たに英語のコンテンツ2種類を追加しました。このことで今までe-Learningによる入学前教育プログラムを実施することのできなかった文系学科にも対応することが可能となり、2011年度以降は、すべての学科・専攻・課程にてe-Learningが実施されています。

■入学前教育プログラムの整理

e-Learningの開始時期の早期化は、入学前教育プログラム全体の整理にもつながりました。2012年度までは、個別指導課題Ⅰを提出した後、e-Learning開始までに約2か月程度の学習空白期間がありました。しかし、2013年度からは、e-Learningの開始時期が早期化されたことに伴い、個別指導課題Ⅰ、e-Learning、個別指導課題Ⅱを連続して学習することとなり、大学入学までの間に学習姿勢がしっかりと身につく入学前教育プログラムへと整理されました。

今後は、大学教員が各付属高校を巡回し生徒と面談をする巡回指導のあり方の検討を含め、総合的に付属推薦候補者の学習を支援することができるように取り組んでいきたいと考えています。

図1にて、各入学前教育プログラム(個別指導課題Ⅰ、e-Learning、個別指導課題Ⅱ)について紹介します。

付属推薦候補者への入学前教育プログラム

■個別指導課題Ⅰ	『個別指導課題Ⅰ』は、「付属推薦入学」推薦候補者に対して、早期に推薦候補学科が選定されることによって生じる解放感や安堵感からくる気の緩みを引き締め、生徒のモチベーションを維持し、より積極的に進学に対する意識を高めるものとしています。夏休み期間の2～3週間で取り組める課題とすることで、学問に対する意識の向上を図るものと位置付けています。
■入学前 e-Learning 学科指定課題 (自由学習コース)	e-Learningは、自ら学習し基礎学力を認識することができる学習プログラムです。大学が求める入学時に持つべき学力を示し、親しみやすい課題から始めることで学習の意義、目的、方向性を見出し、学習へのモチベーションを高め、大学における勉学意欲および学力の向上につなげることを目的としています。また、基礎的な力をしっかり培い、入学後の大学における主専攻科目の理解を容易にするとともに、学びと研究活動に対する自信と意欲を涵養することをねらいとしています。※自由学習コースは、学科指定課題だけでなく、すべてのコンテンツを学ぶことのできるコースです。 コンテンツ 「地球に生きる(地球の温暖化を知る)」「地球に生きる(地球の温暖化を探る)」、「数学」、「物理」、「化学」、「生物」、「Basic English for College Students Ⅱ」、ALC NetAcademy 2の「Power Wordsコース」
■個別指導課題Ⅱ	『個別指導課題Ⅰ』への取り組みに続いて、その発展形として連続性を持ったテーマで冬休みを挟んだ期間の約2～3週間で取り組む『個別指導課題Ⅱ』を与えることにより、学問に対する意識の向上を図ること、さらに高校3年生の後半の期間を大学入学への助走期間と捉え、大学での学習へのスムーズな導入と位置付けています。

【図1】 付属推薦候補者への入学前教育プログラム

付属高校以外との高大連携入学前教育プログラム

近年は、付属高校以外との高大連携も重要性を増しています。新任教員フォローアップ研修会の学長挨拶のなかでも、「付属高校との一貫教育だけではなく、一般高校も含めた高校全体と大学との連続性、あるいは一貫性を大事にしていきたい」という考えが示されています(P3)。

AO・公募制・指定校推薦入学試験合格者へは、以前は外部業者を利用し、課題を課していましたが、2011年度からは、教育支援センターにおいて、高校生活の集大成を目的とした入学前教育プログラムのひとつとして、学科・専攻・課

程からの希望に応じてe-Learningと研究レポートを実施しています。学習の開始時期は、合格発表にあわせて随時スタートする方式(図2)で、合格者個人にユーザーIDとパスワードが与えられ、システムを通じてe-Learningと研究レポートの課題が提示されます。

また、以前は、e-Learningと研究レポートの案内及び問い合わせ窓口が別々に設けられていましたが、2013年度より一本化され、より学習に取り組みやすくなりました。

AO・公募制・指定校推薦入学試験合格者への入学前教育プログラム

		2013年度実施								
		7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
■入学前 e-Learning	学科指定課題									
	自由学習コース									
■研究レポート										

【図2】 AO・公募制・指定校推薦入学試験合格者への入学前教育プログラム(2013年度実施)

FD、SD、教職協働 について情報をお寄せください。(校舎、学部、職場単位で取り組んでいる活動等)
教育支援センター教育支援課 Tel:0463(58)1211(代) E-mail:shien@tsc.u-tokai.ac.jp